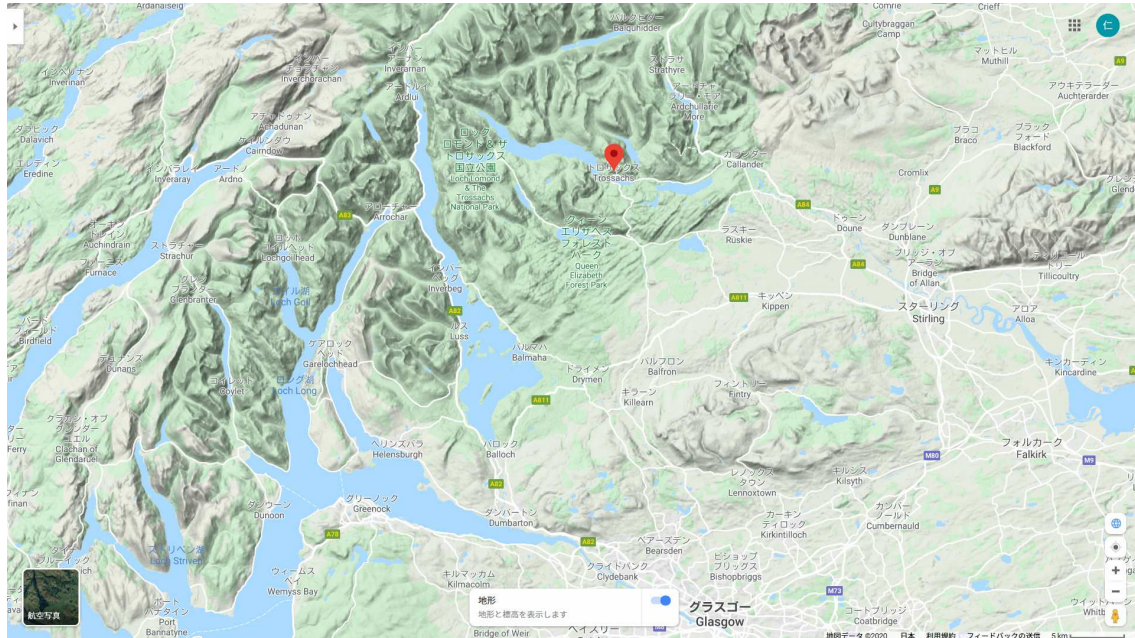


ザ・トロサックス The Trossachs イギリス連合王国 スコットランド



ザ・トロサックス。聞きなれない地名だと思うが、イギリスの北部、スコットランドの中央低地を含む上記の地図の範囲で、赤い点で示された所である。ご覧の通り山が迫り、氷河期に名残の切れ込んだ湖が散在する土地の一画である。これより先、スコットランド北部は標高 1000m 前後で決して高くはないが、鋭い岩峰など、険しく厳しい山岳風景が広がる。トロサックスは、丁度その手前、なだらかな丘陵も多いし、刈り込まれた草原に羊が草を食むなど、イングランドの湖水地方を思い浮かべる牧歌的な風景も広がっている。1988 年夏の長期に渡る旅の最後は 10 日間のイギリス縦断のドライブ旅行だった。演劇祭がたけなわで蜷川幸雄演出のマクベスなどの催しもあったエディンバラ (Edinburgh) から北上し、古都スターリング (Stirling) 経由でこの地に向かった。

スターリング城

歴史の刻まれたスターリングの街で寄るとしたら、やはりスターリング城。人口数万のこの小さな町の北西部、小高い岩山の上に鎮座していた。城への道は石造りの素朴な家々の間を抜けてゆっくりと上る坂。気がつくやうに高度を稼いで城の前まで来ていた。それにしても、この古さが与えるインパクトは半端ではない。イギリスのニューカッスル (Newcastle

upon Tyne) に上陸するまで 10 日間、北欧をめぐっていたが、いずれの街も古さをさほど感ぜず、せいぜい数百年の歴史だろうと思われる土地が多かった。ところがイギリスに上陸して三日目、この苔むした石造りの家々と城や教会を見続けると、千年近い古さに至極重いものを感じた。

城の内部に入ると南北に細長い城の構内を一段ずつ上がって行くことになる。



Stirling 城の建物 中庭から見たもの

奥の四角な中庭へと入ると、そこにグレートホールという宮殿の間が建っていた。中へと入ると、歴代のスコットランド王国スチュアート朝の王の肖像画が掛かっていた。後にイングランドに赴きスチュアート朝初代の王となったジェームズ 1 世のそれもあった。有名なメアリー=スチュアートの子で、スコットランド王ジェームズ 6 世としてエディンバラで誕生し、その後この城で幼児洗礼を受けたと言う。由緒ある王宮をもつ城だった。さらに城の外へと出ると、スターリングの平野を見渡せる展望台に至る。視野前面に広々とした緑の牧草地が展開し、小さく見える点は何かと目を凝らすと、やはり羊の群れ。眺めの良さは、この城が元々砦だったことを物語る。その後、石畳の道を降りて車の所まで戻った。

トロサックス方面へは、国道 A84 を北西へとたどる。暫くはティース川沿いの平野に行く。道沿いに細長く集落が続くカラnderールという街へと入った所で、余りに空腹なのでフィッシュ&チップスの店を見つけ、昼夜兼用の食事にあついた。森嶋道夫先生がその著『イギリスと日本』の中で、「フィッシュ&チップスは、

日本で言えばうどんに当たる身近な軽食」と書いていた。そのイギリスの「うどん」を賞味したわけだ。魚とポテトの量は十分だったが、あまりに大味で期待外れだった。※1

トロサックスに行く

道はこの後、緑の丘陵地を縫うように進む。左手にロッホ・ヴェナチャー(ロッホはスコットランド語で湖の意)が続いていたが、それが途切れた辺りに人家が増えたので、宿探しをしようと道を右へと入る。村の名前はブリッグ・オー・ターク(Brig o' Turk)。スコットランド語で「雄牛が渡る橋」の意だとか。庭に出ていた人に宿はありませんかと聞くと、奥のミラーさんの家が民宿だよと教えてくれた。早速そのお宅を訪ねる。白髪に眼鏡のおばあちゃんが、小さな部屋があるがと言うので、それでOKとして荷を置き、日も長いのでもう少しドライブして来ると外出した。



Brig o' Turk の家 こんな建物だったか？

さて、道を西へと村の名になった橋を渡りトロサックスの中核部へと向かう。わずか 1 km ほどで左手にロッホ・アクレイの青い湖水が見えてきた。その湖水と

周囲の緑以外何もない所に、これも古そうな石造りの教会が。車を手前において徒歩で敷地の中に入る。十字架の石の墓標が隣接し寂しさも漂う無人の教会だった。その名もトロサックス教会。しかし、湖が南側に迫り景色は大変すばらしかった。車に戻りアクレイ湖の周囲を西から南へと回り込むと、道はすこしづつ丘を登り始めた。周囲は、灌木の他は草原で紫色が目立つ。紫色とはヒースの原野だから。こうした景観は日本では見られないので、貴重な体験だった。立ち寄った展望台からは先のアクレイ湖とヴェナチャー湖などが一望できた。



ロツホ・アクレイに臨むトロサックス教会

さて、景色を存分に楽しみ、宿に戻り「アクレイ湖まで行き教会を見て来た」と言うと、ミラーさんは「無人だけれども月に 2 回、日曜の礼拝には巡回牧師が来てくれるのよ」と話し、「私の娘もあの建物で結婚式をあげたの」と語ってくれた。玄関前で今夜同宿のお客様、イングランドから来た壮年世代のジョンさんとその妻アーシュラさんを紹介してくれた。その他、ベルギーからの若いカップルも。夜 10 時から居間でお茶を入れますからと言われ、ひと段落してから出かけた。

ブリッグ・オー・タークの夜

ビスケットをつまみながら、紅茶を飲む集まりだったが、アーシュラさんがドイツの出身だと言うので、ついアーシュラはドイツ語だとウルズラ(Ursula)ですねと余計なことを言ってしまった。英国出身の夫ジョンさんは、先の大戦での敵国同士がつながったことに幾分不快な顔をして、戦艦プリンス・オブ・ウェールズが日本軍に撃沈されたことを何かと強調していた。ベルギーの青年がすかさず、やはり戦争の記憶はなかなか消せるものではないね、とつぶやいていた。

さて二階の今夜泊まる部屋へと戻る。階段脇のわずか三畳ほどの部屋。しかし、ミラー夫人が清潔に保ってくれていて、寝る場所としては十分だった。宿泊費は朝食込みで 1,500 円ほど。この時の旅で最安の値段だったかもしれない。

翌朝、宿の前でベルギーの青年と私が手に携えたビデオカメラのことで、話をしたことを覚えている。話が複雑になると、やはり自分の英語力の拙さが出てくる。つかえつかえ、自慢の小型カメラを説明した。そのカメラで宿主のミラーさんの映像を撮ってから、お別れした。それにしても、容姿が首相のマーガレット=サッチャーによく似ていた。

今日はさらに西へと向かう。その前にアクレイ湖から北へと入り、秘境の雰囲気漂うロツホ・カトリンへと立ち寄った。小ぶりのアクレイ湖と違い、地図で見るとこの湖は奥へと長く続いている。ただし、こちらはずっと細長く岸壁からは見通せなかった。この時は若干曇っており、その神秘的な雰囲気が増していた。この

自然に靈感を得て、二百年前に生きた作家ウォルター＝スコットが詩集『湖上の美人』を書いたとか。文学に疎い私は知らなかったが、児童文学でなじみのある『アイバンホー』の作者だそうだ。カトリン湖の水は確かに清く美しい。後で知った事だが、近くの大都会グラスゴーへと上水を供給しているそうだ。



ロッホ・カトリンに浮かぶ小島

そこから暫く、昨日通った山岳路を抜けてトロサックス最大の湖、ロッホ・ローモンドへと向かう。アバーフォイル、ドライメンと南下。西へと右折し、ローモンド湖の東岸を目指す。この湖も南北に長く、間もなく左手にその湖水が見えて来たが、行ける所まで行こうということで、道が途絶えるベン・ローモンドの駐車場まで湖畔の風景を楽しみながら北上し

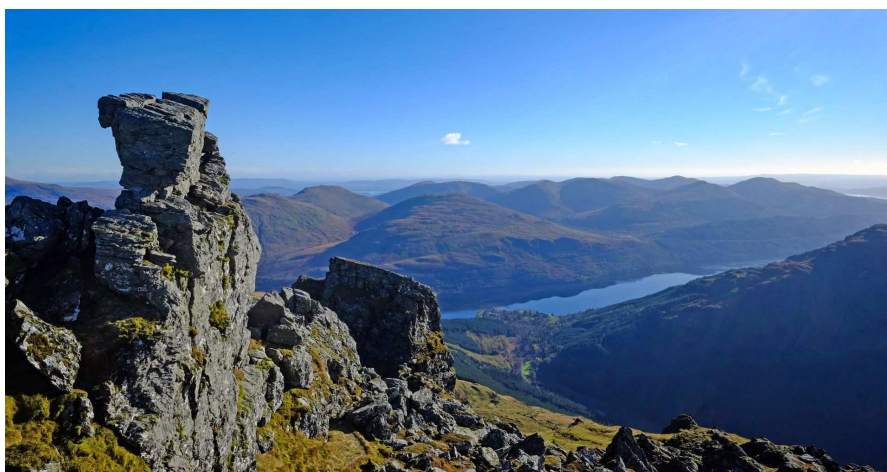
た。ベンとはスコットランド語で山を意味する。湖畔から東を見上げると、草原に覆われた岩峰が聳えていた。標高はわずかに 900m。それでも湖水から急角度でせり上がっており、険しさを感じさせていた。

『カロッホ・ローモンド』

ローモンド湖は同名の歌で有名だ。実は高校に入った時、英語の教科書にこの湖とその歌のことが載っていた。歌は同じスコットランド民謡の『蛍の光』に似て、些か哀愁を帯びながらも耳になじんだ。そして、いつか歌に歌われた土地に行ってみたいと思うようになったのだと思う。それが漸く実現した。

湖はトロサックスの西側を占める場所で、東岸からは湖の向こう岸の景色がひととき美しい。それにしても、風景を占めるのは紫の色。昨日のヒースの原がこちらにも広がっていて、景色を染め上げている。おまけにローモンド湖は、その水まで紫色に見えた。水質にその謎があるのだろう。往き来た道を引き返し、南へ向かうと、わずか 40 km で先の大都会グラスゴー(Glasgow)へと入って来た。

↓ ロッホ・ローモンドを西北から遠望



グラスゴーでは、たまたまバグパイプの野外イベントが開かれており、その行進のパフォーマンスとともに楽しんだ。バンドマンとバンドウーマンが着ていたキルトスカートのタータン模様的魅力に魅了され、チェック柄の品を欲しくなったのはこの時だった。

※1 森嶋道夫先生は、1970年から88年まで、LSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）で、近代経済学を教えた。2004年、故人となられた。

フィッシュ&チップスを、2009年のロンドンへの家族旅行の際、パディントン駅近くのレストラン”GERFUNKELS”で食べたことがある。この時は添えられたグリーンピースもおいしく、洗練された味だった。同じ料理でもどうやってお客に供するかで違いがあるということだろう。

了